金城町の文化財

第１集
—町内の古墳—

1983
島根県金城町教育委員会

金城町の文化財 第1集正誤表

頁	行	誤	正
1	13	上来原の郷田門遺跡	上来原の[illegible]遺跡
10	15	土師器の坏は	土師器の椀は
10	15	第9図1は	第6図1は
10	22	3は器高は低く	6は器高は低く
13	10~11	7世紀初め頃のもの（第6図3.4.7~9.12）	7世紀初め頃のもの（第6図3.4.7~11）
13	11	7世紀前半頃のもの（同図5.6.10.11.13.14）	7世紀前半頃のもの（5.6.12~14）
16	5	坏（5~9）は	坏（5~10）は
16	15	把手付椀（同図27）は	把手付椀（同図11）は

序

われわれの遠い祖先の作りあげた古い文化財は、わが国の歴史文化等の正しい理解に欠くことができないものであり、また、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

われわれはその保存活用が適切に行なわれる様に努めなければなりません。そのためには、これら文化財の実態を把握することが大切であります。

本町では、西中国山地民具を守る会が中心となって民俗資料の収集に努め、昭和46年波佐の山村生産用具758点が国指定重要有形民俗文化財に、昭和47年221点が県指定有形民俗文化財に指定され、民俗資料館及び歴史民俗資料館に収蔵展示しているところですが、このたび、町内の埋蔵文化のうち現在までに調査したものの記録を「金城町の文化財」第1集として発刊することになりました。

本書が、町内における埋蔵文化財に対する理解と認識を高める基点となるとともに、教育、学術、文化振興ならびに郷土の歴史を知る重要な資料として幅広く活用されることを期待するものであります。

終りに、本書発刊にあたり多大なご指導ご援助をいただきました島根県教育委員会をはじめ関係者の皆様のご協力に対し厚くお礼申しあげます。

昭和58年10月

金城町教育委員会

教育長　水崎　斉

例　　言

1. 本書は金城町内の文化財についてできるだけ多くの人たちに知っていただくことを目的に作成したものです。
2. 本書は金城町内の文化財のうち、古墳について特集したものです。
3. 本書に掲載した遺跡分布図は隅田正三氏が作成したものです。
4. 本書で紹介した古墳のうち、金田１号墳は昭和51年に前島己基氏（奈良国立博物館技官、当時島根県教育庁文化課主事）らによって発掘調査されたものです。この古墳の石室実測図は前島氏によるものです。
5. 金田１号墳、火塚平古墳の測量は、いずれもスケール50分の１、等高線10㎝で行ないました。本書ではスケール100分の１で掲載しました。
6. 金田１号墳、火塚平古墳の測量については宍道年弘氏の協力、助言を賜りました。
7. 出土遺物の実測は柳浦俊一が行ないました。
8. 出土遺物の図面は金田１号墳出土の金環（第８図）が原寸大、その他は３分の１で掲載しました。
9. 出土遺物の写真は、土器が３分の１、直刀が２分の１、金環が現寸大で掲載しました。
10. 遺物写真の番号は挿図番号と同一です。（例えば、写真「６－１」は「第６図１」の土器です。）
11. 本書に掲載した出土遺物は、すべて金城町立歴史民俗資料館に保管されています。
12. 本書の執筆、編集は柳浦俊一（島根県教育文化財団文化財主事）が行ないました。

目　　次

1. はじめに …… 1
2. 金城町の遺跡 …… 1
3. 金城町の古墳 …… 6
(1) 金田1号墳 …… 6
(2) 金田2号墳 …… 13
(3) 猿ヶ馬場古墳 …… 14
(4) 下長屋古墳 …… 14
(5) 火塚平古墳 …… 17
(6) 今福古墳 …… 19
4. おわりに …… 19

挿　図　目　次

第1図　金城町遺跡分布図 …… 3
第2図　金城町出土遺物 …… 5
第3図　金城町内古墳位置図 …… 6
第4図　金田1号墳墳丘実測図 …… 7
第5図　金田1号墳石室実測図 …… 8
第6図　金田1号墳出土土器実測図 …… 11
第7図　金田1号墳出土直刀実測図 …… 12
第8図　金田1号墳出土金環実測図 …… 13
第9図　金田2号墳出土直刀実測図 …… 13
第10図　猿ヶ馬場古墳出土土器実測図 …… 14
第11図　下長屋古墳出土土器実測図 …… 15
第12図　火塚平古墳石室略測図 …… 17
第13図　火塚平古墳墳丘実測図 …… 18

図　版　目　次

図版1－1　金田1号墳・2号墳遠景
図版1－2　金田1号墳近景
図版2　金田1号墳出土土器
図版3－1　金田1号墳出土直刀
図版3－2　金田1号墳出土金環
図版3－3　金田2号墳出土直刀
図版3－4　猿ケ馬場古墳遠景
図版4－1　下長屋古墳遠景
図版4－2　下長屋古墳出土土器
図版5－1　火塚平古墳遠景
図版5－2　火塚平古墳近景
図版6－1　火塚平古墳石室
図版6－2　火塚平古墳奥壁
図版7－1　今福古墳遠景
図版7－2　今福古墳近景

1．はじめに

島根県那賀郡金城町は、北は浜田市、南は広島県芸北町に接した細長い町です。山林資源と水資源の豊富な所で、古くから人々はこれを利用して生活してきました。

今から約1,300年前の古墳時代の人々にとっても、山と川は重要な生活の場であったに違いありません。残念なことに、いまとなっては当時の人々の生活全部を知ることはできません。しかしながら、古墳の一つ一つについて詳しく記録することによって当時の社会、生活をかなり知ることができると思います。

本書では各古墳についてできるだけ詳細に記述し、金城町の古墳時代を考える材料を提供したいと思います。

2．金城町の遺跡

金城町内には現在46ケ所の遺跡が確認されています（第1図）。

旧石器時代の遺跡はまだ発見されていませんが、縄文時代と思われる遺跡は下長屋の水佐古門遺跡、上来原の郷田門遺跡、小国の柿ノ木遺跡（小国遺跡）、波佐の槇ケ曽根遺跡があります。これらの遺跡からはいずれも磨製石斧が発見されていますが、土器が発見されていないため詳しい時期はわかっていません。石斧の形態から縄文時代のものと想像できる程度です。出土した石斧は水佐古門遺跡（第2図8）のものが現存長6.4㎝、刃部幅4.7㎝、厚さ約1.6㎝、柿ノ木遺跡のもの（同図9）が長さ9.4㎝、刃部幅5.1㎝、基部幅2.3㎝、厚さ約1.6㎝、槇ケ曽根遺跡のもの(同図10)が長さ10.1㎝、刃部幅6.3㎝、厚さ約2.5㎝です。これらの石斧はいずれも比較的小形で扁平であるのが特徴です。それに対し郷田門遺跡出土のものは第2図11が現存長14.1㎝、幅4.4㎝、厚さ3㎝、同図12が長さ17.3㎝、刃部幅4.9㎝、厚さ3.1㎝の断面円形を呈したもので、比較的大形のものです。これらの遺跡はいずれも川を臨んだ山裾の緩斜面に立地しており、狩りや木の実を集めるのに便利な場所と考えられます。なお水佐古門遺跡は奈良、平安、江戸時代の土器も出土しています。

弥生時代の遺跡は今のところ発見されていません。

古墳時代の遺跡は金田1号墳、金田2号墳、猿ケ馬場古墳、下長屋古墳、火塚平古墳、今福古墳の6基の古墳が確認されていますが、そのうち金田2号墳、猿ケ馬場古墳、下

長屋古墳は壊されてしまいました。古墳については後章で詳しく述べますが、いずれも径10ｍ前後、高さ1～1.5ｍ前後の小円墳で、後期の古墳です。前期、中期の古墳はまだ発見されていません。集落跡もまだ発見されていませんが、古墳を作った人々の住居は古墳にそう遠くないところにあったと思われます。

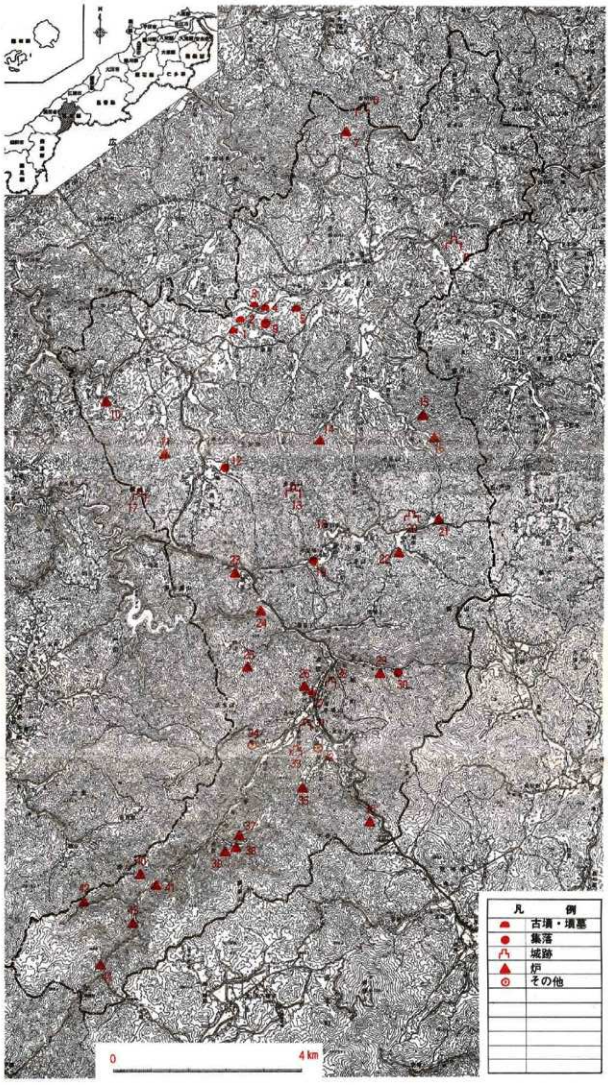
奈良時代、平安時代の遺跡は今のところ水佐古門遺跡１つだけです。第２図１は高坏、２は甕底部（底径15.8㎝）、３は坏底部（底径5.2㎝）、５．６は甕胴部で、いずれも須恵器です。そのほかにも土師器が出土していますが図示できません。すべて小片のため詳しい時期はわかりませんが、２と３は平安時代でもやや新しいものではないでしょうか。水佐古門遺跡出土土器の中でおもしろいものは、５の内面の叩き目です。普通は６のように同心円状のものですが、５は放射状の叩き目です。このような叩き目は島根県では数例しか見つかっていません。

鎌倉時代、室町時代の遺跡は、山城の跡が９ケ所発見されています。北から乙明城跡（本明城跡）、皆合田代城跡、雲城城跡、金木城跡、小国城跡、火の迫城跡、花城跡、一本松城跡、水見城跡です。これらの城跡は充分な研究がなされていないため詳しいことは不明です。このうち最も注目できるのは一本松城跡です。この城は平安時代の終り頃河野氏という豪族によって作られ、その後佐々木氏、小笠原氏と主が変わりながら室町時代まで続いた城です。その規模は大きく、能義郡広瀬町富田城跡に匹敵するものとみられています。この城で最も重要な遺構は、用水を引いたと考えられる「水の手」と、四方をとりまく「畝堀」と呼ばれるものです。一本松城跡については西中国山地民具を守る会が測量調査中であり、その結果が期待されます。

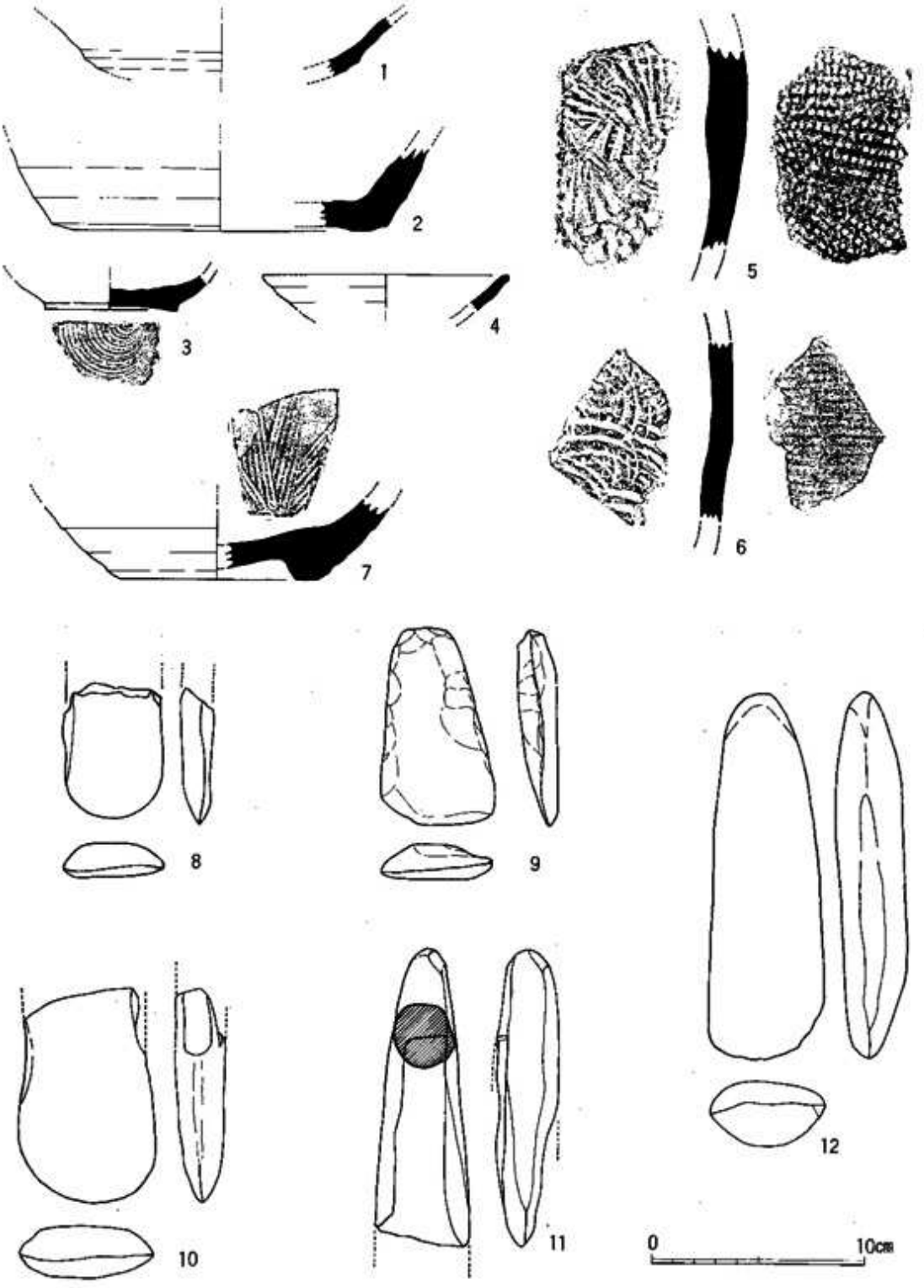
江戸時代の遺跡としては主に鉧跡があります。これは近代以前の製鉄跡で、現在金城町で23ケ所発見されています。北から乙明鉧、藤ケ埆鉧、白甲第１鉧、白甲第２鉧、高良谷鉧、青原鉧、柚根鉧、小屋ケ谷鉧、田野原鉧、犬戻り鉧、長沢鉧、桂迫鉧、黒瀬鉧、表谷鉧、勝示鉧、栃下第１鉧、栃下第２鉧、栃下第３鉧、飯ノ山鉧、来実鉧、鍋滝第１鉧、鍋滝第２鉧、鍋滝第３鉧です。

そのほか、はっきりした時代は不明ですが、中世～近世にかけての遺跡として菅沢墳墓、千年比丘経塚、笠松峠石畳跡などがあります。菅沢墳墓は古墳の可能性もあります。

以上が現在金城町で確認されている遺跡です。さらに詳しい調査を行なえば、多くの遺跡が新たに発見できることと思われます。



第1図　金城町遺跡分布図



第２図　金城町出土遺物（水佐古門遺跡１～８　柿ノ木遺跡９　槇ケ曽根遺跡10
郷田門遺跡11・12）

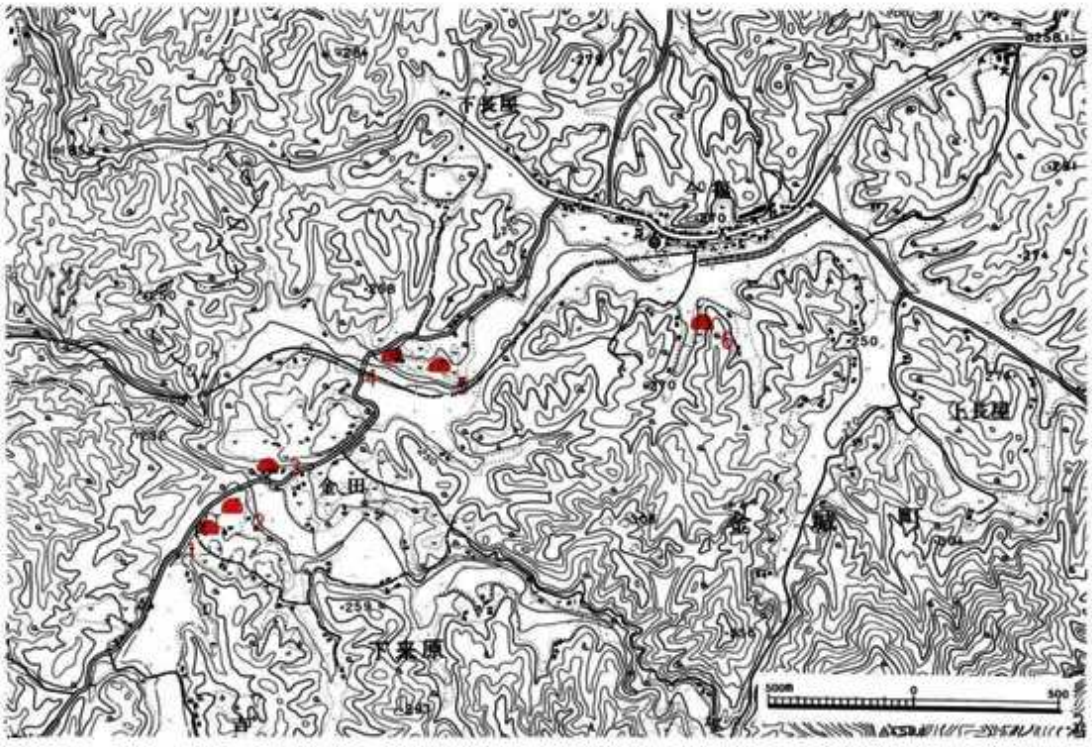
3．金城町の古墳

金城町には今のところ金田１号墳、金田２号墳、猿ケ馬場古墳、下長屋古墳、火塚平古墳、今福古墳の６基の古墳が確認されています。これらはすべて今福地区にあり、特に金田（かなだ）川流域（金田１号墳、２号墳、猿ケ馬場古墳）、下府（しもこう）川流域（下長屋古墳、火塚平古墳、今福古墳）に集中しているといえます。

以下、個々の古墳について詳しく述べていくことにします。

(1) 金田（かなだ）１号墳　下来原金田 1334－3　（第４図　図版１）

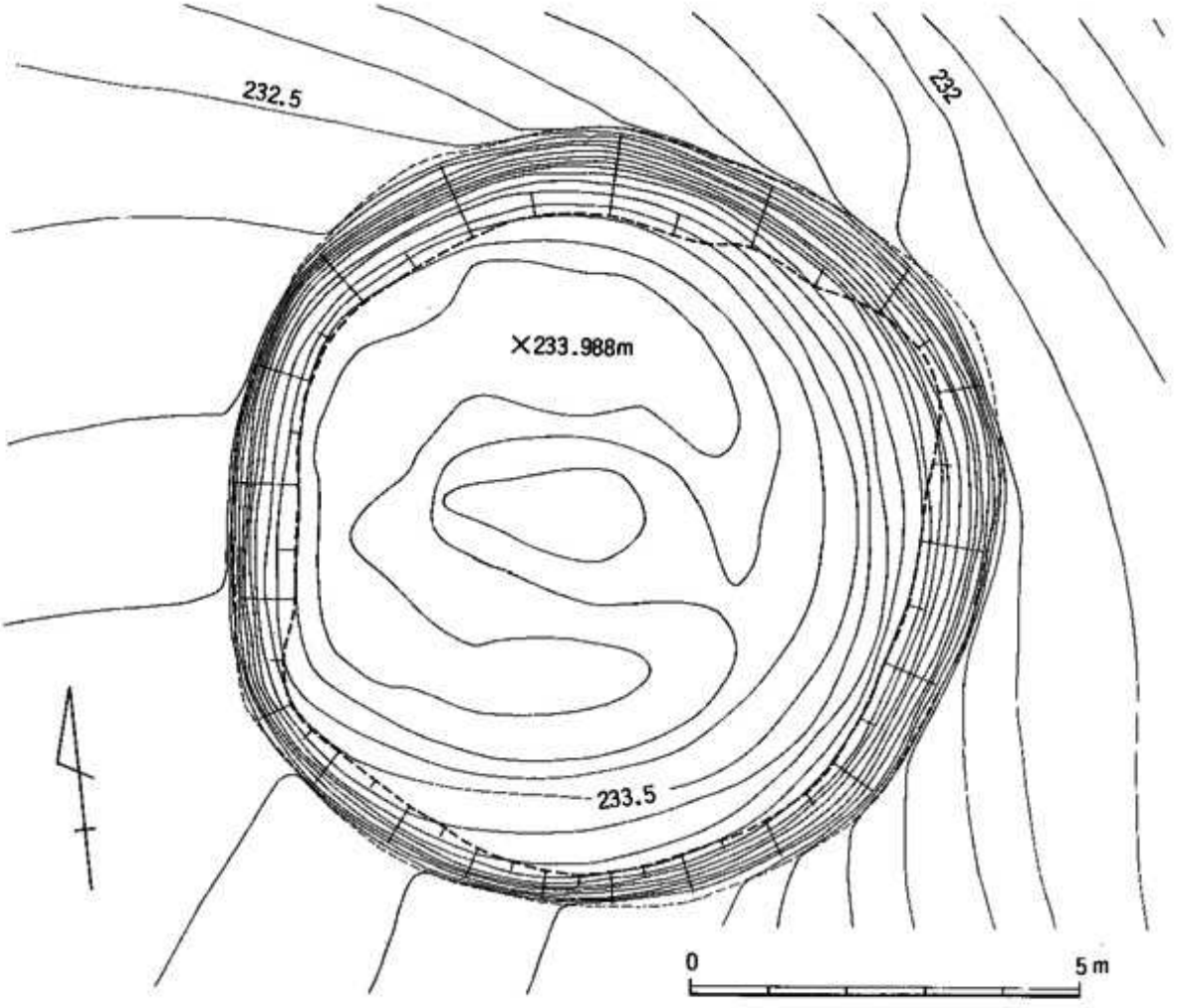
金田川を北に見下ろす標高約 250 mの北に延びる丘陵の上にあり、西には県道金城―桜江線が走っています。現在はたばこ畑の中に小山のように残っています。この古墳は昭和51年たばこ畑造成中に発見されましたが、すでに周辺部分が壊されてしま



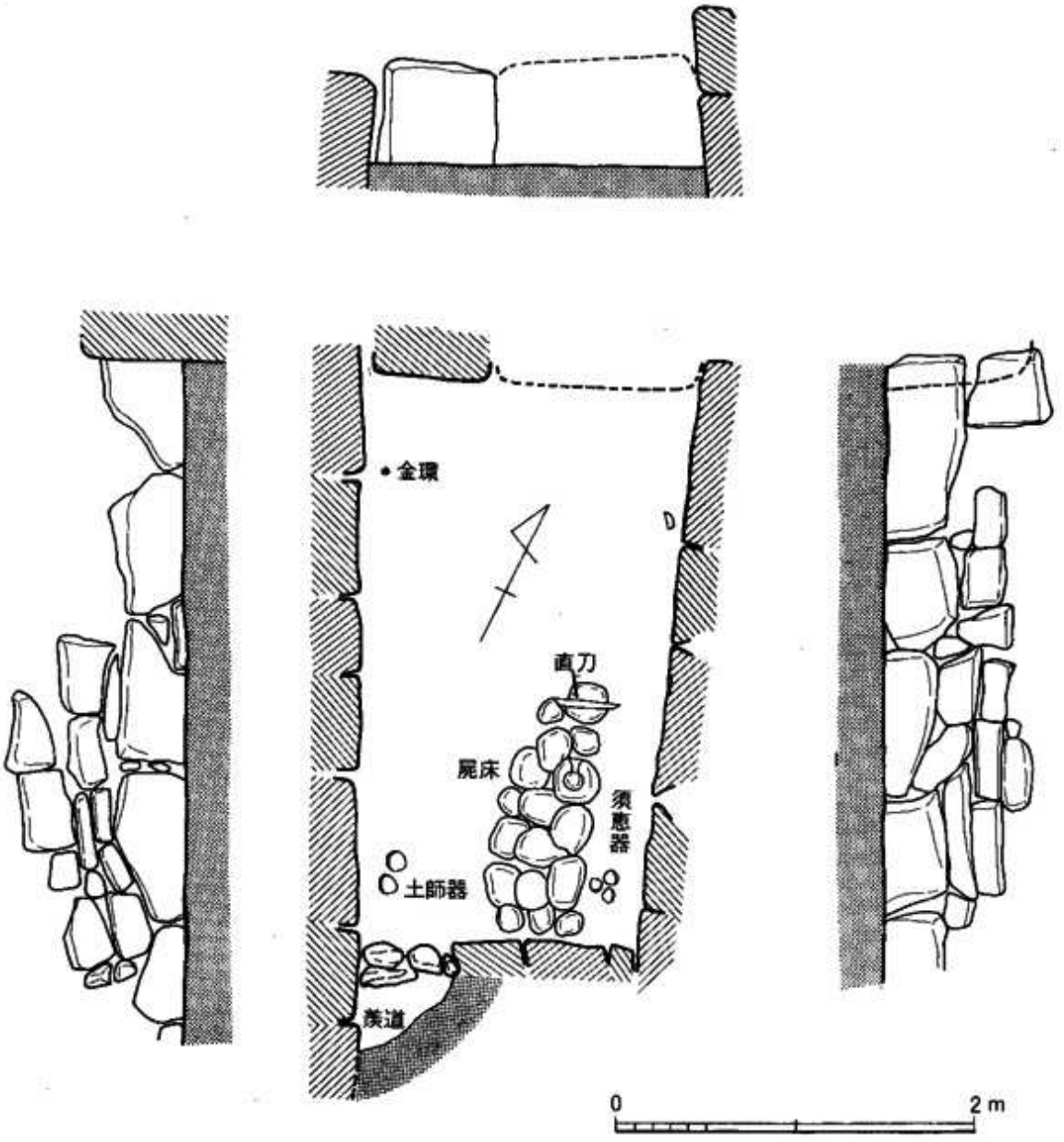
第３図　金城町内古墳位置図

っていたため墳丘の形や周辺を廻っている溝などについてはよくわかっていません。地形測量を行なって残存状況のよい箇所を見ると径約10 m、高さ約1.5 mの円墳ではなかったかと思われます。

主体部（第5図） 昭和51年に発掘調査が行なわれ、埋葬施設（**主体部**）は横から何度でも埋葬ができる**横穴式石室**であることがわかりました。この横穴式石室は、遺体を安置する部屋（**玄室**）に通じる通路（**羨道**）が入口からみて左にかたよっている**左片袖式横穴式石室**と 呼ばれるものです。すでに盗掘が行なわれており天井石はすべてなく、側壁も上部のほうはかなり抜きとられていました。そのため石室の規模を正確に知ることはできません。玄室の規模は石室床面で測った場合、玄室長3.15 m、玄



第4図　金田1号墳墳丘実測図



第5図　金田1号墳石室実測図

室奥壁(おくへき)幅1.9 m、羨道と玄室の境部分の幅1.55 mでした。高さは西側壁で1 m、東側壁で1.56 mでした。羨道部分は調査できなかったため詳しいことはわかりませんが、玄室の入口の部分（玄門(げんもん)）で幅0.5 mを測りました。右側壁は奥壁と約90度の角度で、左側壁は奥壁と約85度の角度で交っているため、平面形は台形を呈しています。玄室はだいたい東南を向いており、その長軸中心線の方位は北－ 22度 －西です。

玄室は自然石をわずかに加工した程度の石を使い平坦な面を内側に向けて組まれています。奥壁は盗掘のために西側最下段の石が1枚だけ残っていました。この石は幅53cm長さ53cmの大きさで、ほぼ垂直に立てられていました。

右側壁は、やはり盗掘のため上部の石は抜き取られていましたが、遺存状況は比較的良好です。最下段には長さ60～100cm、幅30～45cmの比較的大きな石を横積みにし、上面の高さをそろえています。一番奥の石の上には長さ43cm、幅50cmの石がおかれており、その上に天井石があったのではないかと思われます。最下段の石のうち奥から3枚目の石は、長さ83cm、幅30cmとやや小さいもので、上面をそろえるためにその上に、長さ43～77cm、幅14～33cmの石を3個横積みにされています。そしてその上には、長さ33～54cm、幅15～25cmの石が上面の高さをそろえて横積みされてあります。さらにその上に3段目と同じ大きさの石が横積みにされていたようです。石と石とのすき間には小さな石を詰めて補強しています。この壁はほぼ垂直に作られています。

左側壁は、右側壁ほどていねいに作られていません。盗掘のため奥半分は石が抜き取られています。最下段は長さ78～84cm、幅36～40cmの不整形な石を横積みにし上面の高さをそろえようとしていますが、やや不揃いです。その上に大小さまざまな石を2～3段横積みにしています。この壁もほぼ垂直に作られています。

羨道部は前述のように未調査のため詳しいことはわかりませんが、最下段には玄室のよりやや小さい石を横積みしているようです。玄門の部分には7～33cmの大きさの河原石を積んで玄門を閉じています（**閉塞石**）。

袖石の状況はよくわかりませんが、長さ15～45cmの石を3個並べています。

玄室の東南隅には玄室の長軸方向に沿って長さ約1.45m、幅約0.4～0.55mにわたって15～45cm大の河原石が敷かれており、その上から頭骨が検出されたことから、この石敷は死体を置くためのベット（**屍床**）と考えられます。なお頭骨は分析していないため、性別、年齢など不明です。

玄室内からは、盗掘されているにもかかわらず、比較的多くの**副葬品**が出土しました。そのほとんどは土器ですが、その他に鉄製の直刀が1振り、金環（耳飾り）が1個出土しています。遺物については後で詳しく述べますが、この中で特に注目すべきは石敷の屍床の周辺から出土した鉄製直刀と青灰色をした硬質の須恵器と呼ばれる土器です。直刀は頭骨の北側約10cmの位置に石室長軸方向に直交して置かれ、第6図に示す須恵器提瓶は頭骨の南側約20cmの位置に置かれていました。さらに石敷の屍床の東側には、第6図5．6．14の須恵器蓋坏が置かれていました。これらは屍床または

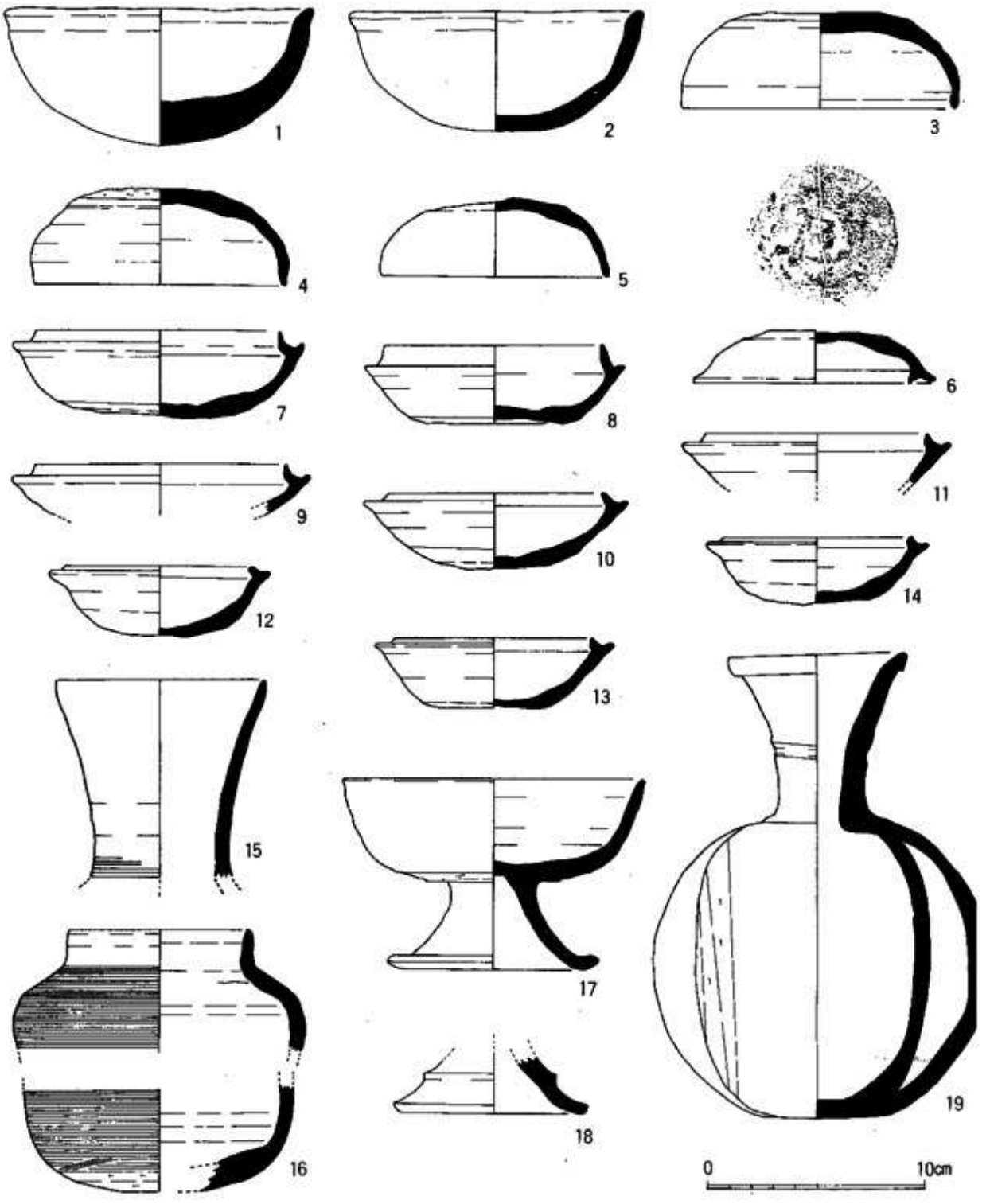
石室床面のほぼ直上から出土しており、埋葬時の状況とほぼ変わっていないと思われます。以上のことから考えると、遺体は石敷の屍床の上に安置され頭の上方に直刀を、胸には提瓶が置かれ、左足もとには蓋坏が置かれていたと考えられます。また、赤褐色を呈した土師器と呼ばれる素焼きの土器（第６図１．２）は玄室西南部の玄門に近いところから出土しています。これも床面直上から出土していることから、埋葬当時のものと考えられます。その他の須恵器、金環は、玄室の奥から出土していますが、いずれも床面から浮いた状態で出土しており、埋葬当時の状況ではないと思われます。おそらく盗掘の際に荒されたものでしょう。

出土遺物（第６図　図版２．３－１・２）　出土遺物は、**須恵器**（ろくろを使って作られ登り窯で焼かれた青灰色の硬質の焼物）17個を中心に、**土師器**（赤褐色をした素焼きの焼物）２個、鉄製の**直刀**１振り、**金環**（金メッキをした環状の耳飾り）１個が出土しています。第６図１．２は土師器の椀（茶椀）です。その他は須恵器で、第６図３～14は蓋坏（茶椀）、同図17、18は高坏（食物を盛るもの）、同図15は、長頸壺（飲物を入れるもの）、同図19は提瓶（水筒のようなもの）です。

土師器の坏は２個出土しています。第９図１は、口径13.6㎝、高さ5.5㎝、２は口径14㎝、高さ6.3㎝を測ります。ともに底部は丸く、体部は内湾して伸び口縁部は短く外反するヘルメットのような形態を呈しています。いずれも風化が著しく、１の口縁部外面にヨコナデ調整が認められる以外は調整不明です。両者とも胎土は砂粒がほとんど含まれず、焼成は良好で茶褐色を呈しています。

須恵器は蓋、坏、高坏、長頸壺、短頸壺、提瓶があります。蓋（第６図３～６）は、４個体出土しており口径10.5～12.6㎝、高さ2.5～4.4㎝で、３～５は天井部が丸く、口縁部は緩いカーブを描きながら「ハ」の字形に垂れます。３は器高は低く扁平で、口縁部内面に短いかえりがつきます。３の天井部にはヘラ削り調整が施されますが、４．５．６は未調整です。また３．５．６の天井部内面には、一定方向の簡単なナデ調整が施されています。その他の部分は回転ナデ調整が施されています。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は31．18は良好ですが３．５は不良でもろいものです。色調は４が灰色、６が暗灰色を呈し、３．５は白灰色を呈しています。なお、６の天井部には「ノ」のヘラ記号が見られます。

坏（同図７～14）は８個体出土しておりいずれも底部が丸く受部とたちあがりを有する形です。口径10～11.6㎝、高さ3.5～3.9㎝のやや大型のもの（同図７～11）と、口径8.6～9.1㎝、高さ3.1～3.2㎝の小型のもの（同図12～14）とに分けられます。前者はいずれもたちあがり部がやや短く内傾しています。後者は８のたちあ



第6図　金田1号墳出土土器実測図

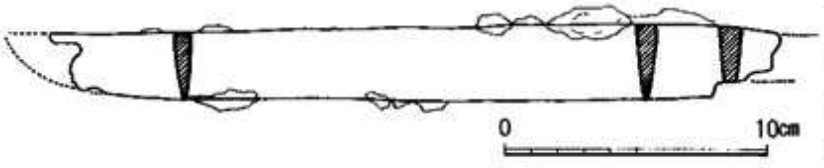
りがやや高いほかはいずれもたちあがり部は非常に短く内傾しています。調整は7の底部全面と8の底部周辺に回転ヘラ削り調整が施される他は未調整です。また、7．8．12．13．14の底部内面には一定方向のナデ調整が施されています。他の部分にはいずれも回転ナデ調整が施されています。胎土にはいずれも砂粒が含まれています。焼成は12．14は不良ですが他は良好で、色調は8が灰色、9．11が暗灰色、7．10．13が暗青灰色、12．14が灰色を呈しています。

高坏（同図17．18）は2個出土していますが、全形を窺えるものは17のみです。17は口径14cm、脚端径9.8cm、高さ8.8cmを測ります。無蓋で、脚部はラッパ状に大きく開き、端部は丸いままです。坏部は底部がほぼ平坦で、口縁部は内湾しながら伸びます。調整は坏部底部外面に回転ヘラ削り調整、同底部内面に不整方向のナデ調整が施される他は回転ナデ調整で仕上げられています。18は脚部小片です。脚端径9cmを測るものです。ラッパ状に大きく開き、端部は平坦です。端部のやや上方には断面三角形の凸線文が廻っています。調整は全面回転ナデ調整が施されています。両者とも胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で色調は灰色をしています。

長頸壺（同図15）は1個出土していますが、口縁部のみで全形を窺えるものではありません。口径9.7cmで口縁部は緩やかに外反して長く伸び端部は丸いままです。調整は頸部外面にカキ目調整が施される他は回転ナデ調整が施されます。全面にうすく自然釉がかっています。胎土には大粒の砂粒が含まれ、焼成は良好で暗青灰色を呈しています。

短頸壺（同図16）も1個だけ出土しています。口径8.4cm、高さ約12cmを測るもので、口縁部は直立気味に短く伸び、肩部はやや張っています。底部は丸底です。調整は底部外面に回転ヘラ削り調整、外面の頸部から胴部にかけてカキ目調整、その他の部分は回転ナデ調整が施されています。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で青灰色をしています。

提瓶（同図19）も1個だけ出土しています。口径8.1cm、高さ21.4cmを測ります。頸部は細くしまり、口縁部は大きく外反し端部は平坦面を作ります。胴部は正面がほぼ円形、側面がだ円形をしています。頸部には一条の沈線文が廻っています。調整は、胴部片面に回転ヘラ削り調整が施される他は回転ナデ調整で仕上

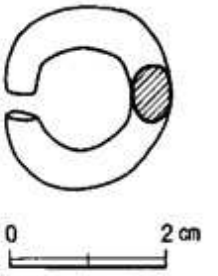


第7図　金田1号墳出土直刀実測図

げられています。なお口縁部から頸部にかけて厚い自然釉がかかっています。胎土には砂粒が含まれ焼成は良好で青灰色をしています。

第７図は鉄製の直刀です。切先と茎端部は欠損していますが、現存長27.9㎝、刃幅は切先に近い部分で2.6㎝、関に近い部分で2.9㎝を測ります。茎幅は2.1㎝です。

金環は１個だけ出土しています（第８図）。径2.3㎝、断面径0.7㎝を測ります。本来は全面に金箔が施されていたものですが、現在では金箔はほとんど剥げ落ちてしまっています。



第８図　金田１号墳出土金環実測図

古墳の年代　出土した土器は６世紀終りから７世紀初め頃のもの（第６図３．４．７～９．12）と、７世紀前半頃のもの（同図５．６．10．11．13．14）の２つの時期に大きく分けることができます。このうち５．６．14は石敷の屍床の周辺から出土しています。

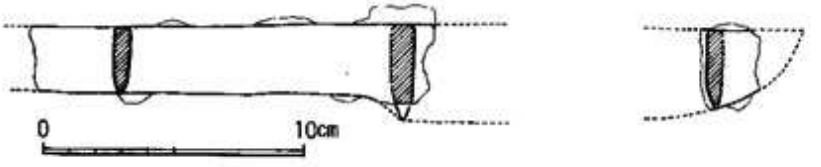
出土土器から、金田１号墳は６世紀の終り頃から７世紀初めの頃の間に作られ、埋葬が行なわれたことがわかります。そして、７世紀前半頃になって再びこの古墳が開けられ先に葬られた人の近親者が埋葬されたものと考えられます（**追葬**）。しかし、その後に追葬された痕跡がみられないことから、この古墳は７世紀前半以降は埋葬が行なわれなかったと思われます。

(2)　金田２号墳　下米原金田1334－３　（図版１－１．３－３）

１号墳と同じ丘陵上の先端にあり、１号墳の北約100ｍ離れたところにあったと思われます。たばこ畑造成の時に発見されましたが、発見された時にはすでに壊されてしまっていました。鉄製の直刀１振りが採集されたことと、石が散乱していたことなどから、ここに古墳があったことがわかる程度です。

主体部　造成中にここから多くの石が出土したことからこの古墳の主体部は、１号墳と同じように、横穴式石室ではなかったかと思われます。

出土遺物　遺物は鉄製の直刀が１振り採集されています（第９図）。切先の部分と茎の部分がばらばらに採集されたため、全形はわかりません。長さは不明ですが、茎の幅は2.5㎝です。



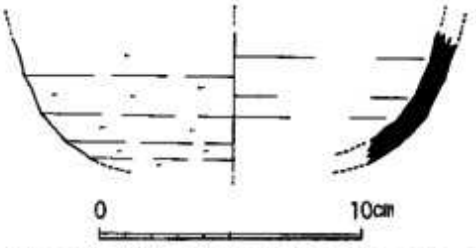
第９図　金田２号墳出土直刀実測図

古墳の年代　土器が出土していないため詳しい年代は不明ですが、主体部が横穴式石室だったなら、この古墳は6世紀後半から7世紀にかけて作られたものではないでしょうか。

(3)　猿ケ馬場古墳　下来原金田朝草原　（図版3－4）

金田川を南西に見下ろす標高約230 mの丘陵上にありましたが、昭和38年に畑地造成のため壊されました。この丘陵はほぼ東西に延びる低丘陵で、古墳は南側の斜面に土まんじゅうのようにあったそうです。ここから南を臨めば、金田川を挟んで金田古墳のある丘陵が見えます。

主体部　主体部は不明ですが、造成中にこのあたりから20～30 cm大の石が多く出土したことから考えると、この古墳の主体部は横穴式石室ではなかったかと思われます。現在は牧草地となっており、天井石と思われる石が残るだけですが、この部分はさほど深く削り取っていないとのことであり発掘調査を行なえば石室の基底部や、溝が検出される可能性が充分あります。



第10図　猿ケ馬場古墳出土土器実測図

出土遺物（第10図）　遺物は須恵器の蓋坏や長頸壺などが出土したそうですが、散逸してしまって現在はありません。第10図に示す土器は古墳の盛土を捨てたという場所から採集され、古墳内に副葬されたものと考えられます。この土器は須恵器の壺の底部破片で、現存部の最大径16.9 cmを測ります。調整は外面に回転ヘラ削り調整、内面に回転ナデ調整が施されています。胎土は粗く砂粒が少し含まれ、焼成は良好で暗灰色を呈しています。

古墳の年代　出土土器がほとんどないため詳しい時期は不明ですが、採集された土器から、6世紀後半から7世紀代に作られたものと思われます。

(4)　下長屋古墳　下長屋河角セド山1082－3　（図版4－1）

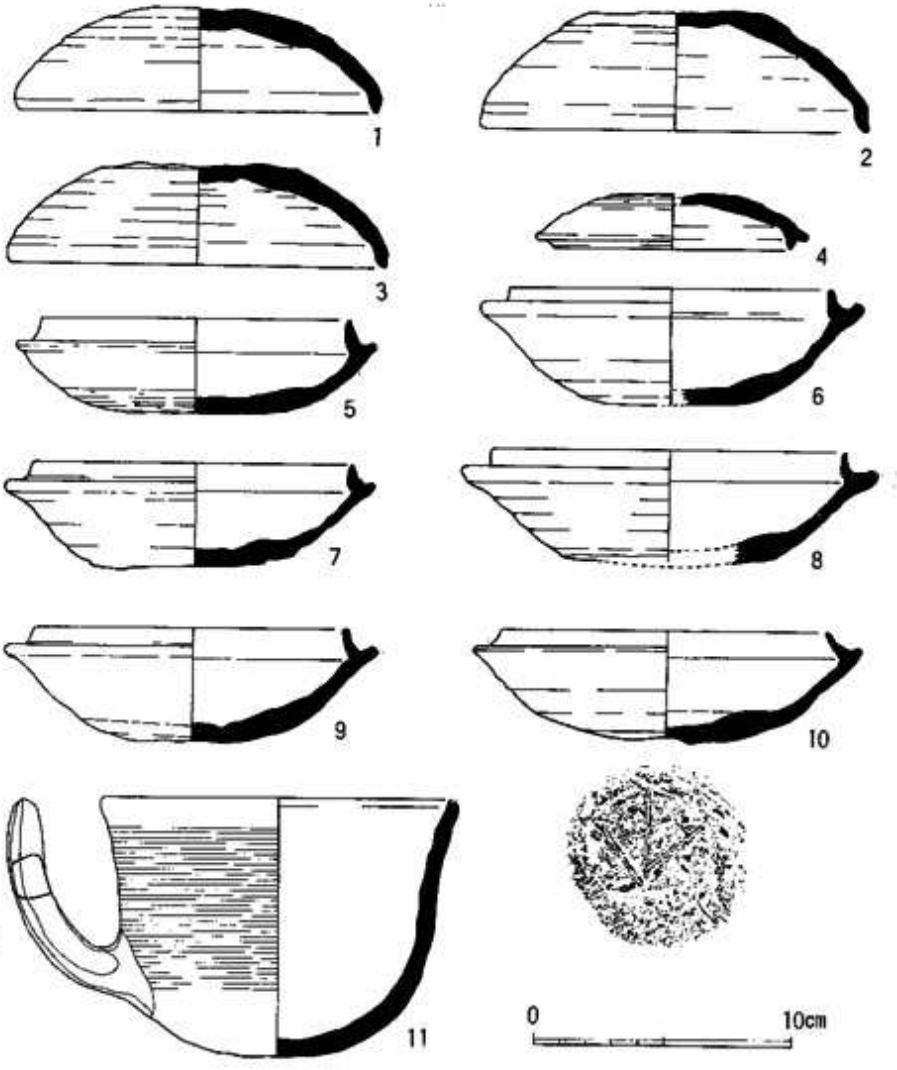
下府川を南に見下ろす丘陵の先端にあった古墳ですが、宅地造成のため消滅してしまいました。この丘陵は本来はほぼ南北に延びる丘陵で、現在県道金城－桜江線の北西約200 mの位置にありました。現在は宅地となっており、古墳の痕跡はまったくありません。造成前はこの丘陵上に高さ約1.3 m、径約4 mの土まんじゅうのようなものがあったそうですが溝などの周辺施設は認められなかったとのことです。

主体部　墳丘上には20～30㎝大の石が4．5個散乱していたことを考えると、主体部は横穴式石室ではなかったかと思われますが詳しいことは不明です。

土器は墳丘を約1ｍ掘ったところからまとまった状態で出土したそうです。しかしながら、正式な発掘調査が行なわれなかったため正確な出土状態は不明です。

出土遺物（第11図　図版4－2）　須恵器の蓋坏、把手付椀が採集されています。

蓋（第11図1～4）は4個体出土しています。口縁部内面にかえりがつかないもの（同図1～3）と、内面にかえりがつくもの（同図4）があります。前者はいずれも口径14.1～15㎝、高さ4～4.5㎝の大型のもので、丸味を持った天井部から、口縁部は緩やかなカーブを描いて垂れ、口縁端部はほぼ直立しています。いずれも天井部外面は簡単にナデ調整が施されますが、ヘラ切り痕がよく残っています。天井部内面には、一定方向または不整方向の簡単なナデ調整、他の部分には回転ナデ調整が施されています。いずれも胎土には大粒の砂粒を含み、焼成は良好です。色調は1．3が青灰色、2が灰色をしています。なお、3



第11図　下長屋古墳出土土器実測図

の断面は茶褐色です。後者は口径10.6㎝、高さ2.1㎝の小型で、口縁部内面に短いかえりがついています。天井部にはつまみがつくと思われますが、破片のためつまみの形状は不明です。調整は天井部外面に回転ヘラ削り調整、天井部内面に不整方向のナデ調整、その他の部分に回転ナデ調整が施されています。

坏（同図5～9）は6個体出土しています。口径12～13.7㎝、高さ3.7～4.6㎝と、いずれも大型のものです。いずれも底部は丸底風で体部は緩いカーブを描いて伸び、受部は短く上外方に伸びています。たちあがりはやや短く内傾していますが、5．6．8のたちあがりは比較的長い。底部外面の調整は5に回転ヘラ削り調整が施されます。他の坏の底部にはほとんど調整が施されず簡単なナデ調整か、ハケ目状の調整痕がみられる程度で、ヘラ切り痕が明瞭に残っています。また6．9以外のものの底部内面には一定方向または、不整方向の簡単なナデ調整が施されていますが、7には非常にていねいなナデ調整が施されています。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好です。色調は5．6が灰色、7．9が暗灰色、8が暗青灰色、10が青灰色を呈しています。また9の断面は茶褐色です。

把手付埦（同図27）は1個体のみ出土しています。用途はよくわかりませんが、食物を盛ったものと思われます。口径13.8㎝、高さ10㎝を測ります。底部は丸底で体部はほぼ垂直に伸び、口縁部近くでわずかに外反しています。底部と体部の境には断面四角形で、長さ約8.5㎝の牙状の把手が貼付けられています。調整は底部外面にろくろを使わないヘラ削り調整、体部外面にカキ目調整、口縁部から体部内面に回転ナデ調整、底部内面に不整方向のていねいなナデ調整が施されています。把手は手捏ねによって作られておりナデ調整が施されています。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で青灰色（一部灰色）を呈しています。

古墳の年代　これらの土器は、5が他のものよりやや古いように思われますが、調整や形態からだいたい6世紀の終り頃から7世紀初め頃のものと考えられます。また4はこの中では一番新しく7世紀前半頃のものと考えられます。このことから、下長屋古墳は6世紀の終りから7世紀の初め頃に作られ、埋葬が行なわれたことがわかります。しかし、7世紀前半に再び埋葬が行なわれたかどうかは、土器の出土状況が不明のためよくわかりません。

(5) 火塚平古墳（ひづかびら） 下長屋河角ヒツカ平1081－1 （図版5）

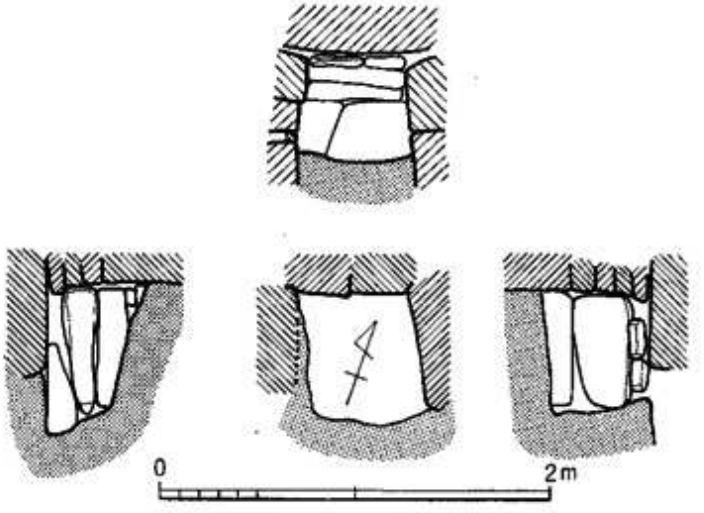
下長屋古墳から東に約500 mほど離れた丘陵の南斜面にあります。古墳の南には、下府川が流れています。

水田を開墾した際にこの丘陵の山裾をかなり削っており、古墳の南側約3分の1が壊されています。墳頂部にも盗掘された時の穴がありますが、遺存状況は比較的良好です。地形測量の結果、この古墳は径約8 m、高さ約1.6 mの円墳で、古墳の北側（山側）には幅約3 mの溝があることがわかりました。

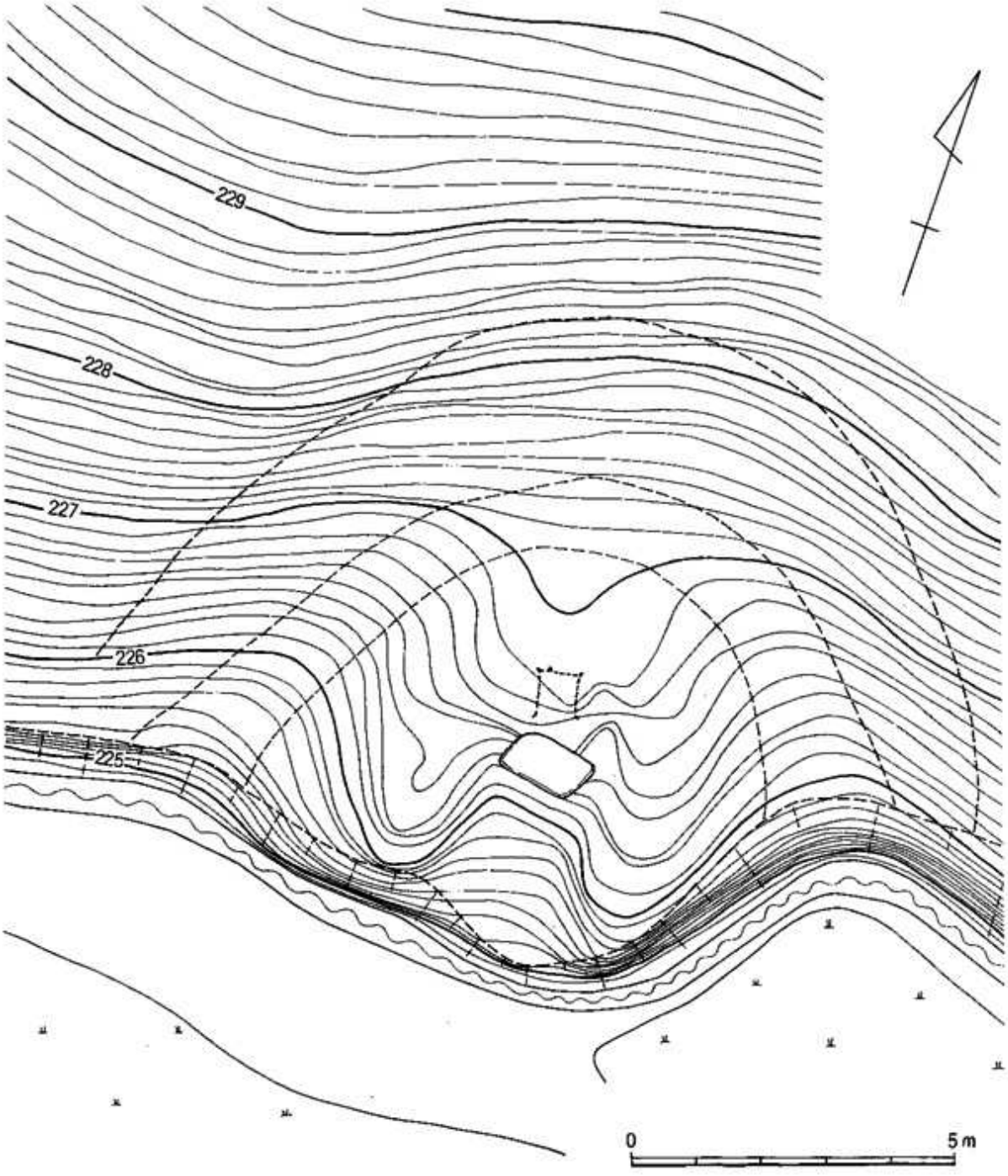
主体部（第12図　図版6）　主体部は横穴式石室ですが天井石が崩れ落ちているため詳しい形や規模はわかりません。観察できた範囲では、奥壁の幅が約0.6 m、高さは0.6 m以上あると思われます。側壁は西側で0.8 m、東側で0.6 m確認したにとどまりました。奥壁と西側壁とはほぼ直角に交わりますが、東壁は約100度の角度で交わっており入口に近い部分がわずかに開いています。玄室は東南を向いており、その長軸中心線の方位は、だいたい北－19度－西です。玄室は自然石をわずかに加工した程度の石を使い、平坦な面を内側に向けて組まれています。土砂が流れ込んでいるため基底部の状況は不明ですが、最下段は比較的大きな石を使っているようです。

奥壁は下段に平坦で比較的大きな石（40 cm×30 cm以上の石と30 cm以上×20 cmの石）を2枚立てて並べ、その上に横長の石（50 cm×5～10 cm）の平坦面をそろえて2段に重ねています。そして天井石とのすき間は、小形の板状の石（25 cm×30 cm）が2個押し込まれたような状況で塞がれています。最上段の石はわずかに石室内面にせり出していますが、奥壁はほぼ垂直に作られてす。

右側壁は下方に約60cm×約30cmの石をやはり横積みにしています。そして天井石とのすき間には約25 cm×約10 cm前後の石を詰めています。この壁はわずかに内側に傾いていますが、構築当時から傾いているのか、構築



第12図　火塚平古墳石室略測図



第13図　火塚平古墳墳丘実測図

後傾いたものなのかはわかりません。

左側壁は土砂のため下方の石の状況はわかりませんが、約60 cm×約15 cmの石を2個横積みにし、その上に50 cm以上×約15 cmの石を横積みにしています。石と石との

すき間には、小さな石を詰めて補強しているようです。この壁は最上段の石がせり出していますが、構築当初はほぼ垂直に作られていたと思われます。

出土遺物　遺物は今のところ検出されていません。

古墳の年代　土器が出土していないためこの古墳が作られた時期はよくわかりませんが、石室の構造などからみて6世紀後半から7世紀にかけて作られたものではないでしょうか。

(6)　今福（いまふく）古墳　久佐塚神畑ハ32の1　（図版7）

火塚平古墳の東約930 mに位置する丘陵の西斜面にあります。この丘陵はほぼ南北に延びており、北には下府川を臨んでいます。下府川を挟んだ北側には今福の五十石部落がみえます。この古墳はすでに盛土がかなり取り除かれており、原形をとどめていません。現在では径約3.5 m、高さ約1 mの土まんじゅうのような高まりが残っているだけです。

主体部　石が多くみられることから、主体部は横穴式石室ではないかと思われますが、現状ではどのような構造をしているのかは不明です。なお、近くにこの古墳の天井石とみられる0.7 × 1.1 mの板状の石が1個あります。

出土遺物　遺物は今のところ検出されていません。

古墳の年代　土器が出土していないためこの古墳が作られた年代はよくわかりませんが、主体部が横穴式石室なら6世紀から7世紀にかけて作られたものと思われます。

4．おわりに

何万年もの狩猟、漁撈の生活を経て（旧石器時代、縄文時代）約2,300年前に朝鮮半島南部から北九州地方に稲作が伝わると短期間に東北地方まで稲作が広がりました（弥生時代）。稲作によって生活が安定するとともに権力を持つ者が現われ、大きなお墓を作ることによってその権力を誇示するようになりました。このようなお墓（**古墳**）がだいたい4世紀から7世紀にかけて全国で多く作られましたが、この時代を**古墳時代**と呼んでいます。

古墳時代は約400年の間続きましたが、最初のころの古墳と後のころの古墳では性格が変化しています。古墳時代前期には各地域で絶大な力を持った首長だけが古墳に葬られていましが、古墳時代後期になると前期には古墳に葬られることができなかった人々

が古墳に葬られるようになります。後期の古墳は小さな土まんじゅうのような古墳が多く、全国の古墳の大多数はこのような後期の小古墳だといわれています。

金城町の古墳研究は進んでおらず未発見の古墳もあるかと思いますが、現在知られている古墳6基はすべて上述の後期古墳です。

金城町内の古墳の分布をみて興味深いのは6基の古墳がすべて下府川とその支流（金田川）に集中していることです。もちろん将来他の地域で古墳が発見される可能性はありますが、この地域に特に集中していることは確かでしょう。この下府川の下流の浜田市国分町下府（こくぶ しもこう）には、大きな横穴式石室を持つ片山（かたやま）古墳や、下府廃寺（しもこうはいじ）など多くの古代遺跡が集中し、同市周布町、益田市東部などとともに古代石見の中心の1つと考えられているところです。このことから古代には、下府川は重要な役割を果していたのではないかと思われます。そして、その上流の今福地区も重要な土地だったのではないでしょうか。

さらに注目できることは、金田1号墳の主体部が片袖式横穴式石室であることです。石見地方山間部の横穴式石室は羨道部と玄室の区別がつかない無袖式横穴式石室が多くこの石室は数少ない形式と言えます。この地方の無袖式横穴式石室が山陽地方山間部の影響を受けたものなら、金田1号墳は別の地方の影響を受けて成立したことになります。

また、金田1号墳の石室は火塚平古墳、今福古墳の石室と比べてかなり大きなことがわかります。このことから金田1号墳に葬られた人の勢力は他を圧倒していたと考えられます。

以上、かなり推測を混じえて金城町の古墳について述べてきました。古墳時代は文字がまだ充分に普及していなかった時代で、地域の歴史を調べる上で古墳は極めて貴重な歴史資料と言えます。上述のように古墳は歴史を雄弁に語ってくれます。しかし、現在私たちが知りうることはまだまだ少なく、将来研究が進むにつれてもっと多くのことがわかってくることでしょう。将来の研究に備え、現在残っている古墳を大切に保存しなければなりません。

参 考 文 献

山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収　昭和46年　県内では土器の実年代を当てる研究はなされていませんが、本書の性格を考えてあえて実年代を当てました。

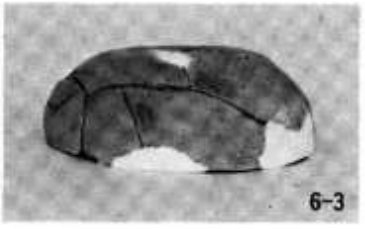
山本清監修『さんいん古代史の周辺』下　山陰中央新報社　昭和55年

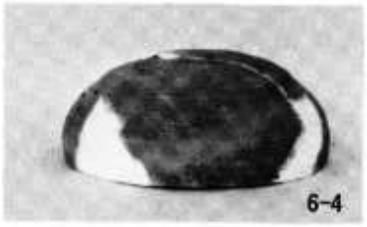
1．金田１号墳・２号墳遠景

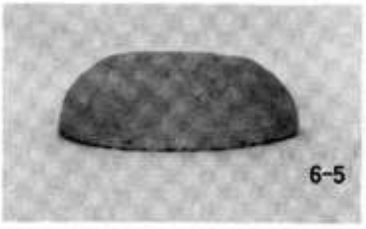
2．金田１号墳近景

6-1

6-2


6-3


6-4


6-5

6-6

6-7

6-8

6-10

6-12

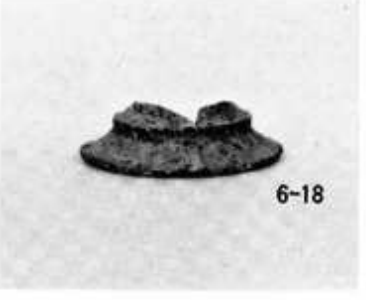
6-13

6-14

6-15

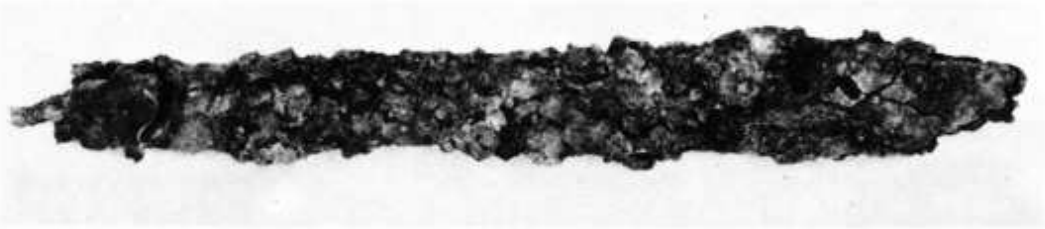
6-17

6-16


6-18

6-19

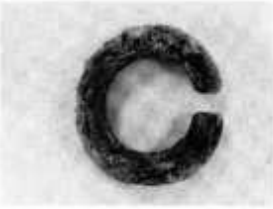
金田１号墳出土土器



7

1．金田１号墳出土直刀

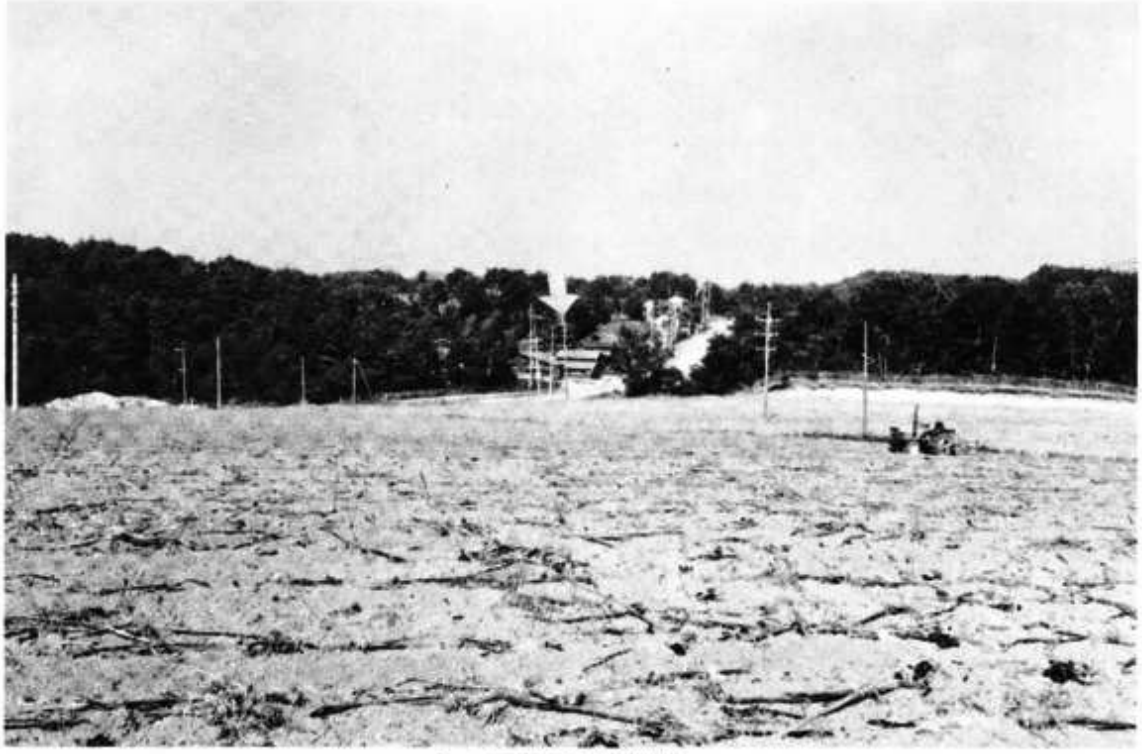
2．金田１号墳出土金環



8

3．金田２号墳出土直刀

9



4．猿ケ馬場古墳遠景

1．下長屋古墳遠景

2．下長屋古墳出土土器

1．火塚平古墳遠景

2．火塚平古墳近景

1．火塚平古墳石室

2．火塚平古墳奥壁

1．今福古墳遠景

2．今福古墳近景

昭和58年10月発行

金城町の文化財

第1集　―町内の古墳―

編集・発行　金城町教育委員会
島根県那賀郡金城町下来原171

印　　刷　有限会社　谷口印刷
島根県松江市母衣町89番地

この印刷物は発行者の了解を得て増刷頒布するものです。

西中国山地民具を守る会